

コアグピア APTT-N を用いた APTT クロスミキシングテスト判定法である WaS-ALD50 法の評価

©下村 大樹¹⁾、河野 紋¹⁾、高田 旬生¹⁾、高田 章美¹⁾、嶋田 昌司¹⁾、松尾 収二¹⁾
公益財団法人 天理よろづ相談所病院¹⁾

我々の確立した WaS-ALD50 法は、APTT 延長検体のクロスミキシングテスト判定法であり、APTT 試薬としてトロンボチェック APTT-SLA (SLA : Sysmex) を使用した。今回、コアグピア APTT-N (CP-N : 積水メディカル) を用いた WaS-ALD50 法の評価を行った。

【対象および方法】

対象は、ループスアンチコアグラント (LA) 陽性 38 検体、凝固因子低下 14 検体、第 VIII 因子インヒビター (VIII i) 48 検体の計 100 検体であり、測定装置はコアプレスタ 2000 (積水メディカル)、APTT 試薬は CP-N を用いた。ALD50 は混合血漿 (正常血漿 50 : 患者血漿 50) の実測値を、正常血漿と患者血漿を直線で結んだ値で除した%値で混和直後を判定するパラメータ、WaS は混合血漿と患者血漿の混和直後から加温後の変化率を求め、混合血漿から患者血漿の変化率を差し引いた値で加温後を判定するパラメータである。

【結果】

ALD50 は LA 群と因子低下群の ROC 曲線から求めたカッ

トオフ値を 90.5%としたとき、感度 100%、特異度 92.9%であった。WaS は VIII i 群と LA 群・因子低下群のカットオフ値を 9.0%としたとき、感度 85.4%、特異度 94.2%であった。ALD50 と WaS を組み合わせたマトリクス表を応用した判別率は LA 群 94.7%、因子欠乏群 85.7%、VIII i 群 85.4%であり、全体で 89.0%であった。LA 群と因子欠乏群の判別率は SLA と同等、VIII i 群は SLA の 95.8%に比べ低かった。この要因として、CP-N は SLA に比べ第 VIII 因子インヒビター高力価の検体で混和直後における混合血漿の APTT 値が延長し、加温後における混合血漿の APTT 値との差が小さくなることで WaS が低くなった。これは、APTT 試薬の第 VIII 因子に対する反応性の違いより生じたと考えられた。

【まとめ】

CP-N を用いた WaS-ALD50 法は、SLA と同様に APTT 延長検体を高率に判別でき、APTT 延長原因の的確な解析に寄与できる。